115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(2)
講題: 為孩子譯出一座橋——三十年東亞文化轉譯的實踐與傳承

張桂娥

(2026.09.24)

摘要

本週課程我們請到了有 30 年以上翻譯經驗的東吳大學張桂娥教授來談論在 AI 翻譯逐漸進展下的日語翻譯的種種問題。張老師一開始就指出：2026 年的現在, A I 翻譯的速度極快,文法也更正確了。但是,時常會出現「文脈斷裂」與「無視角色情感」的直譯悲劇。並指出 AI 翻譯忽略了 1.角色當下的「情感溫度」2.文字背後的「文化脈絡」3.讀者年齡的「接受程度」等三個重要的關鍵。最後指出【A I 知道字典裡的所有意思,卻無法計算畫面另一端「讀者的心」】的結論。

本次課程有 3 個主要核心模組：

1.譯者溫度：如何翻譯孩子的聲音、音感與節奏?

張老師舉了日語的擬聲詞「ざあざあ」以及日文書「きみとぎゅっ」與同學互動，說明翻譯時需考慮的種種要點。並且請同學站在讀者及出版社編輯的立場思索最貼切的翻譯，最後還說明原作者最初命名的構想，找出最合適的中文翻譯。翻譯完後，還要試著發聲念出來，感受實際的溫度。張老師說：當我們將文字唸出來時, 能不能感受到那種緩慢、溫柔環繞的「溫度」?而這種溫度【就是人類譯者無可取代的「聲音感」】。

2.文化衝擊：相同的文字,不同的生活世界。

張老師首先舉了日文「愛人」和台灣的“愛人”，中文的“土豆”和台灣“土豆”的差異，說明即便相同的漢字但在不同的文化和不同的生活經驗下意思可能天差地別。張老師接著舉了日常食物的文化翻譯、建築物的文化翻譯為例在不同的文化背景下，如何翻譯出讓台灣的兒童讀者能感受並理解原文所要傳達的意境。張老師也請同學站在翻譯者的立場，嘗試解決實際發生在翻譯現場的危機。最後指出：翻譯者不僅僅是文字的轉換機,更是跨越文化的「外交官」與「橋樑」。必須在「忠於原著」與「文化轉譯」間拿捏分寸,有時還要安撫雙方的情緒。張老師最後還以自身 30 年以上的經驗做出結論：「字典裡的字選對了不代表翻譯結束。你必須思考:台灣的讀者會如何感受?原作者的意圖有被傳達嗎?這,就是人類翻譯的責任。」

3.AI 轉譯者：從 30 年• 70 冊經驗看未來。

張老師舉了日文書「あの空の色がほしい」為例說明為何青少年文學特別難翻譯，並從翻譯的初稿初校到最後定稿的推敲過程，讓同學實際參與過程中每個譯詞的修改，比較微妙語意的差異，並且藉此說明 AI 翻譯無法跨域的門檻：AI

無法計算出文字在文學脈絡中的「重量」與「距離感」。並做出最後結論：AI 是瞬間切換語言的「高速工具」而人類則是能洞悉深層脈絡的「文化轉譯者」。

張老師最後以「為孩子譯出一座橋」為總結，說明翻譯，是一座文化之橋，將異文化重新編織，揉捻成讀者能深刻共鳴的文字。這不只是文字轉換，這是一場細緻的情感共鳴。這就是人類翻譯無可取代的價值。最後期許同學不要害怕 Al，要學會善用科技培育「跨文化底蘊」成為次世代充滿溫度與精準判斷力的「東亞文化轉譯者」。

中文整理：陳順益

115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(2)
講題: 子どものために、言葉と文化の橋を架ける——日本の児童・青少年文学を訳して 30 年、台湾の訳者が実践してきた東アジア文化交流
張桂娥
(2026.09.24)

要旨

今週は、30 年以上にわたる翻訳経験を持つ東呉大学の張桂娥教授を招き、AI 翻訳がますます進歩する中で、日本語翻訳をめぐるさまざまな問題について講義してもらった。

張先生はまず、2026 年現在、AI 翻訳は非常に速く、文法も以前に比べてより正確になっている一方で、「文脈の断絶」や「登場人物の感情を無視」という直訳による悲劇がしばしば生じていると指摘した。

さらに、AI 翻訳では、以下の 3 つの重要なポイントが見落とされていると指摘した。

１．登場人物がその瞬間に抱いている「感情の温度」
２．言葉の背後にある「文化的な文脈」
３．読者の年齢に応じた「受け入れやすさ」

最後に、張先生は「AI は辞書に載っているすべての意味を知っている。しかし、画面の向こう側にいる『読者の心』を計算することはできない」との結論を示された。

今回の授業では、主に 3 つの核心的なモジュールが取り上げられた。

1. 「翻訳者の温度」——子どもの声、音、リズムをどう訳すか？

張先生は、日本語の擬音語「ざあざあ」や、日本語の絵本『きみとぎゅっ』を例に挙げ、学生たちとの対話を交えながら、翻訳する際に考慮すべきさまざまなポイントについて説明された。

さらに、学生たちには読者や出版社の編集者の立場に立って考えてもらい、最もふさわしい翻訳とは何かを検討してもらった。そして、原作者が最初にタイトルを付けた際の意図や発想についても説明し、その背景を踏まえた上で、最も適切な中国語訳を考えさせた。

翻訳が完成した後には、実際に声に出して読んでみることで、その言葉が持つ「温度」を体感することにも取り組んだ。

張先生は、「私たちが文字を声に出して読んだとき、そこにある、ゆっくりと優しく包み込むような『温度』を感じることができるだろうか。そして、この温度こそが、人間の翻訳者にしか生み出せない『声の感覚』なのだ」と語られた。

2. 「文化の衝撃」——同じ言葉、違う生活世界。

張先生はまず、日本語における「愛人」と台湾で使われる「愛人」、また中国語の「土豆」と台湾で使われる「土豆」の意味の違いを例に挙げた。同じ漢字を使っていても、文化や生活経験が異なれば、その意味は大きく異なる場合がある。

続いて、日常的な食べ物や建築物をめぐる文化翻訳を例として取り上げ、異なる文化的背景を持つものをどのように翻訳すれば、台湾の子どもたちが原文の伝えようとしているイメージや世界観を感じ、理解できるのかについて説明された。

また、張先生は学生たちに翻訳者の立場から考えてもらい、実際の翻訳現場で起こり得る問題や困難をどのように解決するのかを考える機会を与えた。

最後に張先生は、「翻訳者は単なる文字の変換装置ではなく、文化を越えてつなぐ『外交官』であり、『橋』でもある」と指摘された。原作に忠実であることと、文化的に適切な形へと翻訳することの間で、適切なバランスを取らなければならない。時には、双方の感情を和らげる役割まで求められることもあるという。

そして、30 年以上にわたる自身の翻訳経験を踏まえ、次のようにまとめられた。「辞書に載っている言葉を正しく選んだからといって、翻訳が終わったわけではない。台湾の読者はどのように感じるのか。原作者の意図はきちんと伝わっているのか。そこまで考えることこそが、人間の翻訳者の責任なのだ。」

3. 「AI 翻訳者」——30 年・70 冊の経験から

張先生は、日本語の書籍『あの空の色がほしい』を例に挙げ、なぜ青少年文学の翻訳が特に難しいのかについて説明された。そして、翻訳の初稿から初校、最終的な校正・決定稿に至るまでの推敲のプロセスを紹介し、学生たちにも実際に参加してもらった。一つひとつの訳語がどのように修正されていくのかを確認しながら、微妙な意味の違いについて比較・検討した。

この実践を通して、張先生は AI 翻訳が越えることのできない領域についても説明された。AI には、文学的な文脈の中で、一つの言葉が持つ「重み」や「距離感」を計算することができないのだという。

そして、最後に次のような結論を示された。「AI は、瞬時に言語を切り替える『高速なツール』である一方、人間は、言葉の奥深くにある文脈を読み取る『文化の翻訳者』なのだ。」

張先生は最後に、「子どものために、言葉と文化の橋を架ける」という言葉を全体のまとめとして示された。

翻訳とは、文化と文化をつなぐ橋である。異文化をそのまま移し替えるのではなく、それをもう一度織り直し、練り直すことで、読者が深く共感できる言葉へと変えていくものなのだ。それは単なる文字の置き換えではなく、細やか

な「感情の共鳴」を生み出す営みでもある。そこにこそ、人間による翻訳にしか持ち得ない、かけがえのない価値がある。

最後に張先生は、学生たちに「AI を恐れるのではなく、テクノロジーを上手に活用しながら、自らの『異文化を理解する力』を育ててほしい」と語り、次世代を担う、温かさと的確な判断力を備えた「東アジア文化の翻訳者」へと成長することを期待して、講義を締めくくられた。

中国語整理
陳順益
日本語翻訳
CHATGTP
日本語修正
塚本善也